

## 言語過程説における場面論

時枝誠記の「場面論」では、『現象学叙説』から「意識のノエシス・ノエマ的構造」（二二二頁と二二五頁）を僅かに引きながら対象と意識とについて述べている。時枝は、あくまで山内得立から学び取ったことながらを披瀝しているに止まり、現象学それ自体、あるいはフッサールへの言及はない。時枝の現象学理解は、山内の『現象学叙説』の枠内に収まっていたと観ることができる。

言語過程説の構築過程で、「言語の存在条件としての主体、場面及び素材」を説明したが、時枝は「我々のわれ」が言語的表現行為を為す処として場面を捉えた。「に於いてある場面」（『国語学原論』）として捉え言語的表現行為論の解明を旨したのである。この「場面論」は、現象学を超えていている。話者と聴者とが言語的表現行為を為す処に主客融合の場面が拓かれ、開かれることを明らかにしているからだ。

時枝の場面論を検討すると、そもそも、純粹意識における現象を見極める現象学的方法に定位したままで言語過程説の根幹である場面論が成立しうるのか、こういう根本的な問いを発せざるを得ない。「場面は純客観的世界でもなく、又主体的な志向作用でもなく、いはゞ主客の融合した世界」であって「我々の言語的表現行為は、常に何等かの場面に於いて行為されるもの」という場面論（原論44）が果たして展開することができるのだろうか。現象学における志向とは一個の自己意識における対象志向性であるが（但し『イデー』までのフッサール）、時枝の志向性は、 $\wedge$ 我々の我 $\vee$ としての志向性である。言語過程説においては、意識は純粹意識ではなく表現意識であり、意味附与と意味充実を、行為として為し遂げる実践的意識こそを問題にしている。その時枝にあっては、表現行為と無関係の意識が対象と対峙することは想定されえない。

時枝の学的探求過程を、導いたものは、若き時枝のイデーであったと考えられる。人—間の言語的表現行為が為される場面の究明、表現行為が場所的に限定さ

れることへの考察へと歩を進めることができたのは、時枝のイデーであった。時枝の表現を実践論的に捉える一貫した視点であり、「言語は人間の表現理解の一つである」という時枝誠記の卒論以来の理念である。

時枝の言語過程説における場面論の形成過程を、時枝の諸論稿を追跡し、時枝の理論形成過程を辿ることで、言語過程説の構築過程を追思考する、この試みが本稿の課題である。